

緑の庭が四季をいろどる



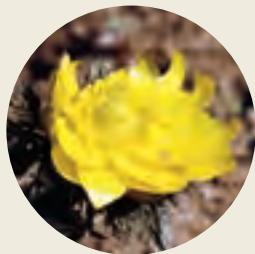
生誕100年記念 水木洋子邸案内板



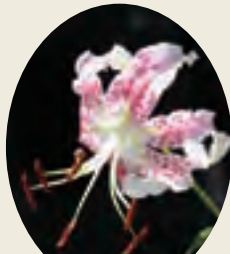
オトメツバキ 2～4月開花



オオヤマレンゲ 5～6月開花



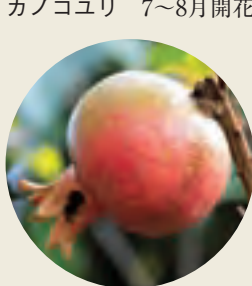
フクジュソウ 2～4月開花



カノコユリ 7～8月開花



ヨウナシ 4月開花 10月実



ザクロ 9～10月結実

水木洋子邸と市川市文学ミュージアム

★案内板



水木邸 JR本八幡駅北口から徒歩15分 京成八幡駅から徒歩10分
市川市文学ミュージアム JR本八幡駅南口から徒歩15分

水木邸 公開日 毎月第2・4土曜日とこれに続く日曜日
(1, 2, 12月は変更する場合があります)

公開時間 午前10時～午後4時

市川市文学ミュージアム

開館時間

火～金曜日 10:00～19:30 (企画展示室の入室は19:00まで)

土・日・祝日 10:00～18:00 (企画展示室の入室は17:30まで)

※資料室は 10:00～17:00

(図書の閲覧、複写申込みは16:30まで)

市川市鬼高1-1-4 (生涯学習センター2階)

電話 047-320-3334

休館日 毎週月曜日 (月曜が祝日の場合は翌火曜日休館)

館内整理日 (毎月最終平日※8月と12月は除く)

年末年始

編集: 水木洋子市民サポーターの会

発行: 市川市文学ミュージアム 2014年3月

<http://www.city.ichikawa.lg.jp/cul01/mizuki.html>

脚本家／水木洋子邸



千葉県市川市八幡5-17-3

いつの間にか三十年、私は今までこんなに永く住んだ土地はない。知らぬ間に根が生えて、今では庭の樹木、果実、花、みんな別れ難い存在になってしまった。
市川市と云えば幸田露伴、永井荷風、北原白秋等々、故人が愛好された土地としても有名なが、母や近所の方たちが、こんな良い所はない、終生ここに果てると言うのを、何気なく私は聞いていたのだが、今ではそれがしみじみとわかる。



和室にて1953年(昭和28)



庭から見た水木邸全景



執筆の場だった掘りゴタツのある書斎



飾り棚と珍しい電蓄の並んだ和室

水木洋子の暮らした家

1947年6月、隣の佐藤家の二階で暮らし始め、後にここに
あった借家を買って増改築を重ねました。
土地 819.81平方メートル（約249坪）
建物 延べ床 100.14平方メートル（約31坪）



- 玄関 外回りは栗のなぐり、土間は黒い瓦タイル、杉と白竹の
竿縁天井で、数寄屋風のしつらは鎌倉の吉屋信子邸に
似ているといわれます。
- 和室 元々の借家の間取りが残された8畳間。母の遺影が飾ら
れ、ここで愛犬と撮った写真や床の間に背に執筆中の写
真もあります。
- 広縁 広い庭に面した10畳ほどの開放的な空間は1959年ごろ増
築。屋根の垂木を兼ねた竿縁天井や細かい造作の飾り棚
など数寄屋風で、来客用に大きなテーブルのソファが置
かれました。
- 次の間 主に母糸いが使っていた部屋で筆筒や仏壇などがあり
ます。水木が生活していた頃は和室でした。
- 書斎 最後に増築された仕事の間。舟底天井で書棚もベッドも
造りつけです。内土間のついた8畳中央の掘りゴタツから
眺める庭の緑が美しい。
- 台所 天井から造りつけのハッチと扇型の食器棚が目をはさま
す。晩年は主にここで寝起きしていたようで、1991年12月
と92年のカレンダーが最後のころの生活を偲ばせます。

脚本家／水木洋子と市川

「ひめゆりの塔」「裸の大将」「純愛物語」「竜馬がゆく」
など映画やドラマの脚本家として知られる水木洋子（本名
高木富士・1910年生）は、1947年（昭和22）から市川市八
幡に住まい、ここから数多くの名作を生み出しました。
水木は、戦後、日本映画の黄金時代を担った一人である
と同時に、女性脚本家の草分けとしても、その名を知られ
ています。

1997年（平成9）、自宅や貴重な自筆原稿、蔵書などを含
む所有財産の全てを、将来市川市に寄付する契約を交わし、
2000年（平成12）から市川市と市民サポーターによる資料
整理や顕彰事業が始められました。
2003年（平成15）4月、水木は92歳の生涯を閉じましたが、
市川市ではその功績をたたえ後世に伝えていくために、「市
川市水木洋子文化基金」を設立し、市民サポーターの協力
を得ながら、さまざまな事業を展開しています。
寄贈された資料は、「市川市文学ミュージアム」にて紹介
しています。また、「水木洋子邸」では、水木の暮らしぶり
を伝える生活資料を公開しています。

主な作品名

映画(リメイクを除く)		「怪談」	1964
「女の一生」(東宝)	1949	「氷点」	1966
「また逢う日まで」	1950	「妖婆」	1976
「安宅家の人々」	1952		
「おかあさん」	1952	テレビ	
「ひめゆりの塔」	1953	「竜馬がゆく」	1968
「あにいもうと」	1953	「女人平家」	1971
「にぎりえ」	1953	「灯の橋」	1974
「山の音」	1954	「こぎとゆかり」	1978
「浮雲」	1955		
「女の一生」(松竹)	1955	ラジオ	
「ここに泉あり」	1955	「林道」	1942
「驟雨」	1956	「北限の海女」	1959
「あらくれ」	1957		
「純愛物語」	1957	演劇	
「裸の大将」	1958	「白き一頁」新派	1937
「キクとイサム」	1959	「箱根山」新派	1962
「おとうと」	1960	「にぎりえ」文学座	1971
「あれが港の灯だ」	1961	「おさい権三」文学座	1973
「婚期」	1961		
「もず」	1961	オペラ	
「につぼんのお婆あちゃん」	1962	「ちゃんちき」二期会	1975
「甘い汗」	1964		